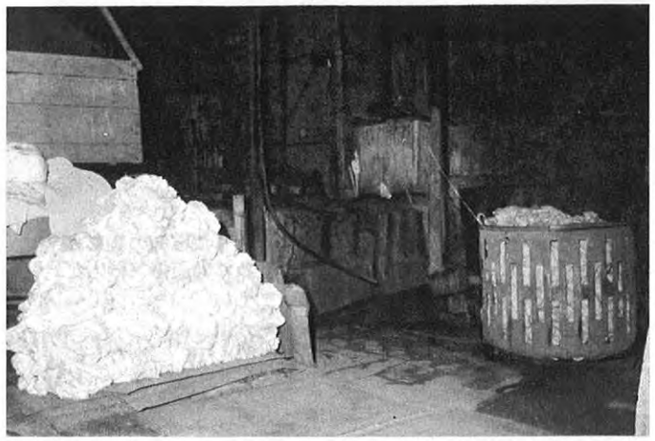
風土に根ざした文化伝統を大切に

古来からの風土に根ざした勝れた文化伝統というものは大事にしたいものです。社会的に価値のある遺跡、あるいは文化の保存も大切なことですが、昔から伝わる野趣に満ちた伝統工芸を堀り起し、これをひとつの地域の産業として伸ばすことも大変に意義のあることです。

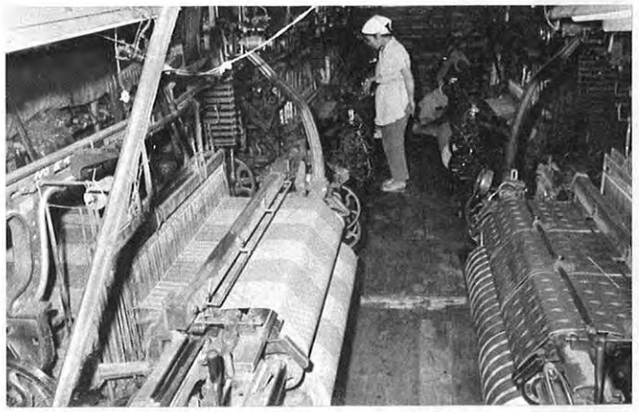
伝統工芸



▲原料となる木綿糸

▲藍染め作業

▲肥後絣の各種柄と製品



▲製織工程は機械化されている

肥後絣（熊本市川尻町）

肥後絣の特徴は木綿の丈夫さと柄の地味さ、素朴さにあります。

生地の紺は植物のアイで染めた糸で織られています。小柄の連続模様が肥後絣の本来の柄ですが昔からある十字、井桁、亀甲模様に加え現代調の水玉など三、四十種の柄があります。

ほとんど和服に仕立てられていますが、壁張りなど室内装飾に、あるいは財布の素材などにも利用されています。

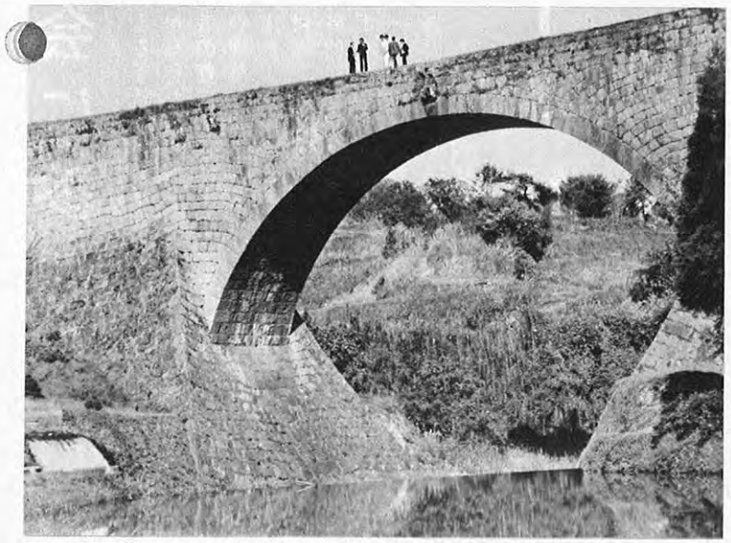
文化財

六殿神社の楼門（下益城郡富合町木原）
—国指定重要文化財—

古くない室町時代の建物として、もとの形をよく保っているのが六殿神社の楼門です。

この楼門は1549（天文18）年に宇土城主名和伯耆守顕忠が奉納したと伝えられ、桁行16尺、梁間9尺、高さ26尺の入母屋造で茅葺の楼門です。柱は丸くすべて丹（に）でぬられ、屋根を支える優美で複雑な組物や、逆さの蓮弁を持つ勾欄などがあります。その工法は巧妙精致を極め優雅な足利建築の傑作であり、一般には「釘無し楼門」の名で知られています。

六殿神社の楼門
▼一般に釘無しの楼門と呼ばれている



▲巨大な弧をえがく通潤橋

通潤橋（上益城郡矢部町城原）
—国指定重要文化財—

通潤橋は県下で最大の眼鏡橋です。

1855（安政2）年、矢部の惣庄屋の布田保之助が、八代郡種山石工の宇市郎・丈八兄弟の協力を得てつくったものです。

橋の高さは約20.2m、橋上の幅が約6.3m、アーチの直径が約28mで逆サイホンの原理を応用した独創的な設計が施されています。

橋とはいうものの、実はその名前が示すとおり用水橋としてつくられたもので、橋の中央には三本の水道が埋めこまれています。

この橋が完成したおかげで用水が白糸台地に通じることになり、約1km²の荒野が美田となりました。